

【資料紹介】

京都西往寺宝誌和尚像附属文書「誌公觀世音縁起」の翻刻と紹介

神 野 祐 太

【資料紹介】

京都西往寺宝誌和尚像附属文書

「誌公觀世音緣起」の翻刻と紹介

神野 祐太

【キーワード】

伊豆国 南禅寺 庭冷山 天嶺山 浄土宗

【要旨】

京都西往寺宝誌和尚像に附属する「誌公觀世音緣起」を紹介する。「誌公觀世音緣起」は、元禄二年（一六八九）に西往寺四世念蓮社專譽が記した西往寺像に関する緣起である。二部構成で、前半に中国における宝誌和尚の説話について諸書を引用しながら紹介し、後半では西往寺像の由来について記す。真偽不明の言説を含めて、奈良時代から江戸時代に至る西往寺像の逸話が多く載せられる。

最も注目すべき内容は、西往寺像の伝来である。西往寺像は伊豆国庭冷山の小堂に安置されており、疱瘡除けの利益があった。江戸時代前期にはかなり損傷を受けていたらしく、優婆塞光舟が発見し伊豆国から西往寺に移したという。

はじめに

京都西往寺（京都市下京区高辻通大宮西入坊門町八三四）の宝誌和尚立像は、日本で造られた数少ない宝誌和尚の彫像で、縦に裂けた面部から十一面觀音菩薩の顔があらわれる特異な姿で知られる。本像は京都府の寺宝調査によって見出され、昭和二十三年（一九四八）三月、恩賜京都博物館（現、京都国立博物館）で開催された第二回京都寺院重宝新資料展で初めて一般に公開され、毛利久氏によって大安寺に安置されていた宝誌和尚像との形の類似や像の表面にノミ目を残した鈍彫り像として紹介された^②。平成十年（一九九八）六月には重要文化財に指定される^③。

本像に附属する文書や額類については、毛利氏の論考や重要文化財指定時の解説等^④で触れられるもののこれまで全文が紹介されることはなかった。そこで本稿では、本像に附属する史料のうち、「誌公觀世音緣起」の全文を紹介する。同書には宝誌和尚の中国と日本の説話が多く載せられており、後半には西往寺像の伝来について詳しく述べられている。本稿では西往寺像の伝来に注目してみたい。

一 西往寺の概略

まず、西往寺の概略について述べておきたい。寺史については、『蓮門精舍旧詞』^⑤、『京都坊目誌』^⑥、同寺に伝わる『西往寺由緒並二曆代上人御戒名』^⑦によって知ることができる。

西往寺は山城国愛宕郡大宮（現、京都市下京区高辻通大宮西入坊門町）に所在し、山号を来迎山、院号を聖衆院と号す。浄土宗鎮西派金戒光明寺に属し、本尊を阿弥陀如来像とする。

開基は『蓮門精舍旧詞』では慶長年間（一五九六～一六一五）、『西往

寺由緒』では元和（一六一五～一六二四）の頃、『京都坊目誌』では創建年不詳とするが、源蓮社秀誉上人頑石含岌（厳岌頑石）が開山したことは三点ともに共通する。天明八年（一七八八）に類焼したが、寛政年中（一七八九～一八〇一）に本堂を復興した。明治十一年（一八七八）には葛野郡朱雀村長福寺を合併し現在に至る。

開山の秀誉上人は武蔵国出身（『檀林鎌倉光明寺志』⁸、『蓮門精舎旧詞』とも相模国出身（『西往寺由緒』、『浄土伝燈総系譜』⁹上、『略伝集』¹⁰ともいい、はじめ道誉貞把のもとで出家し、牛秀上人の法嗣となり瀧山大善寺（東京都八王子市）に住した。のちに鎌倉光明寺の幹事を勤めた後に、大津、摂津と関西を転々とし、最後に京にやってきて西往寺や四条西念寺、五条常德寺を開いた。寛永七年（一六三〇）十二月八日に逝去した。秀誉上人の寿像が西往寺に伝わる。¹¹

その後二世天蓮社曇誉上人岌果（寛文四年〔一六六四〕五月十二日寂¹²）、三世法蓮社寂誉上人良空恢山（延宝七年〔一六七九〕五月三日寂¹³）と続き、四世念蓮社専誉上人甚阿恢（快）存の時に、宝誌像が西往寺にもたらされた。

二 「誌公観世音縁起」について

「誌公観世音縁起¹⁴」は、紙本二十枚をつないだ縦三三・九cm、横九九・八cmの卷子である。罫線を設けて全部で三八七行にわたって縁起が墨書される。箱の蓋裏の貼紙に左記のように記される。

厨子左右聯句寫 喜捨下村岡
 □洛 西往道場中観自在菩薩本縁起文 表題讃句二枚^{トモ} 卷帛 徳丸内
 維時文政三庚辰歳次仲秋上浣 白井儒医先生筆 外宮池上氏

文政三年（一八二〇）八月に箱と巻帛を新調した際に記されたものである。

卷子には題箋がなく、箱裏では「西往道場中観自在菩薩本縁起文」と記される。本文中に西往寺像が「誌公観世音ほさつ」と呼ばれていたことがみえ、天保十一年（一八四〇）の墨書銘がある本額「誌公観世音略縁起¹⁵」はこの縁起の内容を短くしたものである。そのため本史料を「誌公観世音縁起」と呼ぶのが最も適当であろう。

縁起の成立は奥書によれば元禄二年（一六八九）三月上旬とみられ、西往寺四世念蓮社専誉上人甚阿恢（快）存が撰述した。内容は前半に宝誌和尚の事績、後半では本像の来歴を記す。全文は巻末に掲げた。

前半部は中国仏教を編年で紹介する『仏祖歴代通載』、『仏祖統紀』、『釈氏稽古略』、日本で撰述された『宇治拾遺物語』、『観音感通伝』、『仏法神変集』等を参照し宝誌の誕生から逝去までの神異僧としてのエピソードを多数紹介する。いずれも荒唐無稽な説話であるが、江戸時代に宝誌和尚がどのような僧として知られていたのかをうかがうことができる。本稿ではひとつひとつの説話について出典を示して詳述はしない。その中で宝誌が日本と関わるエピソードとして『野馬台詩』を作ったことが記される。『野馬台詩』は宝誌がつくった預言書とされ、吉備真備が蜘蛛の這った通りに読んだという吉備真備入唐絵巻の挿話で知られる。中世・近世・近代にも人口に膾炙していたとされ¹⁶、宝誌和尚といえは『野馬台詩』の作者と認識されていたようだ。

特に本像の伝来について知るうえで重要なのは後半部分である。

本像は梁武帝が紫栴檀で造らせた宝誌像¹⁷であり、建康の鐘山に安置されていた。その像を入唐していた役小角がもらいうけ、帰国後伊豆国庭

冷山に安置したという。

本像は日本で造られたことは間違いなく梁時代の仏像でないことは明らかである。また、役小角が入唐した事実はない。しかし、紫栴檀という香木で造られた点は一木造りで素地仕上げという本像が霊木から造られたことを強く意識させる部分であり、中国からの将来仏であると考えられたのもこの縁起が記された当時の人々の本像に対する考えが反映されているように。

また、役小角と結びつけるのも興味深い点である。役小角は鬼神を役する神異僧として著名であり、伊豆国に配流になったことは『続日本紀』文武天皇三年（六九九）五月二十四日条に「丁丑、役君小角、伊豆嶋に流さる」とみえる⁽¹⁸⁾。本像が伊豆国に伝来したことから、時期は不明なものの宝誌と同じ神異僧の役小角と結びついたのだろう⁽¹⁹⁾。

「誌公觀世音緣起」の続きには伊豆国での本像に対する具体的な信仰が述べられる。空海が本像を見つけて草堂を建立、その堂は平安時代末期の石橋山合戦で焼失し、伊豆守（源）仲綱が父源頼政の菩提を弔うために一堂を再建。粗末な藁堂であったが、病を癒す誌公觀世音菩薩として伊豆国中の人々から信仰された。さらに明德元年（一三九〇）には伊東村近郷に住む山本図書という人は子が疱瘡に懸り失明したので、本像に祈願した。そうすると子の目がみえるようになった。それを記念して草堂のある高峯に石碑を建立したという。

空海から源仲綱の内容は、空海が伊豆国に来たという平安時代初期の記録が見当たらないこと、源仲綱は以仁王の乱で父頼政とともに討死していることなどから、いずれも史実とは考えにくい。明德元年の疱瘡治癒の記事は、具体的な年紀が記される数少ない例であるが、山本図書や石碑については不明である。

このように伊豆国で信仰を集めていた本像は、「当尊かく都に出給ふ事光舟昔日豆州在住の砌ふ覚に此尊を拝み奉り山中にうつもれ雨露のしたゝり、ふかく尊像損し給ふ事を悲しみ彼所の人々に此尊像を乞受、遙々都に隨身せしめ尊像破壊し給ふ所をかいつくるひ、後世ほたいのために当寺常住物に納給ふものなり。維時貞享四年仲秋時正日願主市タ子 光舟法名西岡浄紅善士喜捨之」と、貞享四年（一六八七）に光舟が伊豆国に滞在中に拝んでいたもので、損傷が激しいためもうけ京都に移動させ修理を施し、後世の菩提のために西往寺に寄進をしたという。寄進後も本像の霊験はとまらず、専誉上人がこの「誌公觀世音緣起」を完成させる二か月前の元禄二年正月には、光舟の枕元に本像が立ち、宝誌像が「さかゆるや補陀落山の花さかり」と一句詠んだという。

本像を伊豆国でもらいうけ西往寺へ寄進した光舟については、「誌公觀世音緣起」の中で「優婆塞」とも呼ばれることから、男性の在家信者と思われるが、他に具体的な史料が知られず不明と言わざるをえず、光舟が西往寺に本像を寄進した理由や西往寺住持専誉上人との関係もわからない。

以上のように「誌公觀世音緣起」によれば、本像は鐘山（梁武帝造像を命ずる）↓伊豆国庭冷山（役小角将来）↓西往寺（優婆塞光舟移動）と伝来した⁽²⁰⁾。前述したように中国からの将来仏とは考えにくく、毛利久氏以来の指摘のように作風から平安時代に造られたとみるのが自然である。

三 宝誌像の原所在

「誌公觀世音緣起」中の「庭冷山」は近世の地誌にみられる。『増訂豆州志稿』巻四に「町岭山⁽²¹⁾」とあり、『掛川誌稿』谷津村条には「丁令山 東

の方海涯に屹立す。上ること十町許、海中の七島一眸にあり、頂上平かなること、南北四五十歩、東西二十餘歩、少く水の溜まる所あり、土人或は天禮山と呼ぶ⁽²²⁾、と、庭冷山と同名である町岭山・丁令山があり、天禮山とも呼ばれていたことがわかる。すなわち、現在の河津町に所在する天嶺山と考えられる⁽²³⁾。

この天嶺山には虚空藏堂があったらしい。『掛川誌稿』谷津村条には、「天禮は僧の名、旧天禮か建る虚空藏堂あり、高峰にして堂守無に因て廃す、其趾に虚空藏の石造を安置す、台座に刻して云、宝暦七年辛丑三月、吉田玄知造立之」とみえ、同書が成立した天保十年（一八三九）には、虚空藏堂は廃れ虚空藏菩薩像の石像が残される状況であったことがわかる。虚空藏堂がいつから存在するかは不明である。しかし、他に天禮山にある堂宇については他に知られず、「誌公観世音縁起」にみえる庭冷山の小堂はこの虚空藏堂にあたるかもしれない。

天嶺山の北麓には古刹南禅寺がある。南禅寺には九世紀から十二世紀にかけて造られた仏像が伝えられる。本尊薬師如来坐像、両脇侍の観音・地藏菩薩立像をはじめ、梵天、帝釈天、二天像が安置され、他に破損仏が多数存在する。

南禅寺には多くの古仏が伝えられるにもかかわらず、創建に関わる同時代史料がなく、江戸時代までの寺史には不明な点が多い。『豆州志稿』には、奈良時代に行基が開創し自刻した薬師如来像を安置したというが、江戸時代に編纂された史料であるため、全てを信頼することは難しい。境内地から奈良時代とみられる塑像の螺髪が出土している⁽²⁴⁾。多数の古仏を伝えるため、大規模な寺院であったことをうかがわせる。

本堂の棟札によれば、文化十一年（一八一四）には「仙洞山那蘭陀寺別当東宝院八世権大僧都順教法印」の代に「奉再興薬師観音地藏三尊鎮

座精舎一字」と本堂を再興したことがわかる⁽²⁵⁾。この時期には那蘭陀寺と呼ばれ、薬師如来坐像と地藏菩薩立像、十一面観音立像が脇侍として安置されていた。『豆州志稿』廃那蘭陀寺条には、行基が開創し自刻した薬師如来坐像を安置したといい、古には大寺といいその後訛り南禅寺と呼ぶようになったという。那蘭陀寺と南禅寺は同じ寺院とみなす。一方、『掛川誌稿』では、那蘭陀寺と南禅寺は別の寺とし、二寺が同時に荒廃したので、再興する時に統合して一つの寺として那蘭陀寺と呼ぶようになったという説を載せる。

本像はこれら南禅寺の仏像群との類似性が指摘される⁽²⁶⁾。宝誌和尚像と南禅寺の仏像群を比較すると、地藏菩薩立像とは、衲衣と覆肩衣の着け方がおなじで、二つの衣を体部正面でV字形に打ち合わせ、衲衣の端を右足膝部にあらわし、衣文線を薄く彫る表現、表面の衣文はあらわすのに対して背面は造作をしない点、などの類似点がみられる。また、帝釈天像の衲衣の衣文線は左上から右下にむかつてなだらかにあらわされる表現や内衣の袖口部の中央部をややすぼめる点が宝誌像にも認められる。これらのことから、両者は作風的にかなり近いものを感じられ、同じ工房で造られた可能性も考えられよう。

南禅寺は江戸時代には荒廃が進んでいたようで寺外に仏像が流出したようである。そのような南禅寺伝来の伝承を持つ仏像が二軀知られる。すなわち、千葉・称念寺聖観音菩薩立像⁽²⁷⁾（像高一四五・二cm、木造）、宮城・成覚寺聖観音菩薩立像⁽²⁸⁾（像高一六五・〇cm、木造）である。いずれも、平安時代の作風を示し、一木造りの素地仕上げで、南禅寺の諸像と共通する点がみられる。

本像もこうした南禅寺周辺から持ち出された仏像の一軀であろうか。ただし「誌公観世音縁起」によれば本像は中世には独尊で祀られていた

可能性が高いことから、早い時期に南禅寺の諸像とは別々に伝来したと推測される。

四 伊豆から京への移動

本像がなぜ伊豆から遠く離れた浄土宗寺院西往寺に伝わったのか理由は判然としない。秀誉上人が相模国もしくは武蔵国出身であること鎌倉光明寺に在籍していたことから、浄土宗のネットワークを通じて東国にゆかりのある西往寺に迎えられたのかもしれない。

西往寺で本像が安置されたのは誌公堂であった。誌公堂は天明八年（一七八八）の火災によって焼失したが、後身の観音堂（東面）が境内の南西隅大宮通りに沿って建っていた。そのことは昭和初頭の西往寺伝来の境内図によってわかる。この再建された観音堂の中には「誌公觀世音縁起」箱蓋裏の貼紙にみえる宝誌像を納める厨子があり、厨子の両扉には白井儒医先生筆の聯句が書かれていた。大宮通りの道路幅拡張工事あるいは太平洋戦争の強制疎開のため昭和二十年（一九四五）に観音堂は撤去された。そのため昭和三十四年の境内図には観音堂はみえない。宝誌像が納められた厨子や厨子扉の聯句はこの時に失われたと思われる。

むすび

本稿では、西往寺宝誌和尚像に附属する「誌公觀世音縁起」について紹介した。西往寺像が、江戸時代以前に伊豆国で信仰を集めていた靈験あらたかな仏像であり、西往寺に移坐された後にも、光舟の夢枕にたち句を詠むなど靈験を現していたことがわかる。

本稿ではとりあげることができなかった西往寺像に附属するもう一つの卷子「誌公像賛」は、貞享五年（一六八八）から元禄九年（一六九六）

にかけて、複数の僧が西往寺像を詠んだ漢詩を集めた史料である。これらは、西往寺像が西往寺にもたらされた後、黄檗僧高泉性激らがかわって成立したものである。高泉と西往寺の関係や、「誌公像賛」からわかる西往寺像の京での影響力については別稿⁽²⁹⁾にて紹介する。

註

- (1) 『第二回京都寺院重宝新資料展目録』（京都府社会教育課・恩賜京都博物館、一九四八年三月）。淺湫毅氏のご教示によれば、京都国立博物館の台帳には昭和二十七年（一九五二）に恩賜京都博物館から京都国立博物館になった段階ですでに寄託品となっている。
- (2) 毛利久「宝誌和尚像」（『古文化』一、一九四八年十月、のちに『日本仏像史研究』（法蔵館、一九八〇年三月）所収）。
- (3) 指定名称は「木造宝誌立像」。平成四年（一九九二）度住友財団の助成を受け美術院によって修理が施工された。
- (4) 「木造宝誌立像（西往寺）」解説（『月刊文化財』四一七、一九九八年六月）。長井里緒奈「中国、日本における宝誌像と西往寺木造宝誌立像」（『美術史研究』六〇、二〇二三年十二月）。
- (5) 『蓮門精舎旧詞』第四四、西往寺条、『浄土宗全書』統一八、六八〇頁上段。
○西往寺 山城国愛宕郡大宮 来迎山聖衆院 起立慶長年中開基源蓮社秀譽 嚴岌頑石上人生国武州学問檀林并附法鎌倉光明寺遷化寛永七庚午歲十二月八日行年八拾歳
- (6) 『京都坊目誌』下京第九学区之部、西往寺条、湯浅吉郎・碓井小三郎編『京都叢書 京都叢書刊行会、一九一五年十二月、一八〇頁。
- (7) 『西往寺由緒並二層上人御戒名由緒沿革』は、昭和十六年（一九四一）に西往寺十八世聖譽が記したものを昭和五十六年二月に十九世問後が書写した史料である。冒頭に西往寺の由緒をのべ歴代上人を初代から十八世まで記す。由緒沿革

は左記の通り。

由緒沿革

抑々當寺創ハ元和ノ頃開山源蓮社秀譽上人頑石含叟大和尚ニシテ俗姓ハ藤原氏相模鎌倉ノ人道譽貞把ニ就テ出家シ牛秀ニ法ヲ嗣グ瀧山大善寺ノ主トナリ次ニ鎌倉光明寺ノ幹事トナル天正末年近江甲賀郡三雲村西往寺大坂ニ於テ西往寺ヲ建テ京都ニ上リ西念寺五條ノ上徳寺最後ニ當西往寺ヲ建立シテ本尊阿弥陀佛及ビ善導圓光兩大師ヲ脇ストシテ安置シ奉リ我像ヲ自作シテ関東ヨリ持チ来リシ五重ノ傳書ヲ像中ニ納メシ故宗史上有名ナリ寛永七年十二月八日寂シ給フ蓋シ傳書ハ現在ナク其後天明ノ大火ニ罹リ一物モ余サズ記録ナド焼失セリ然レドモ當寺墓所ノ一隅ニ開山堂アリ為御木像ノミ焼失ヲ免ガレシ事幸ナリ後寛政ノ頃本當座敷等洞譽信曉和尚再建シ又天保ノ頃諦譽圓中和尚庫裡ヲ建立シ續イテ嘉永年中ニ常譽然阿和尚書院ヲ増築シ以テ現今ニ及ビシヲ略記シ畢ンヌ

昭和十六年

沙門十八世 聖譽

昭和五十六年二月

十九世 阿後謹ンデ写替ス

- (8) 『檀林鎌倉光明寺志』、『浄土宗全書』一九、六四八頁下。
- (9) 『浄土伝燈総系譜』上、『浄土宗全書』一九、三八頁。
- (10) 『略伝集』含牛上人伝、『浄土宗全書』一八、四四九頁上〜四五〇頁上。
- (11) 秀譽上人坐像は現在本堂本尊阿弥陀如来坐像（江戸時代）の向かって左側の須弥壇上に安置される。『西往寺由緒』では、もともと開山堂に安置されていたとする。また同書や『略伝集』含牛上人伝には本像の像内に鎌倉光明寺の伝書を納めたとされ、これらの伝書を取り出そうとすると様々な異験がおきたという。現状、これらの伝書は像内には残っていない。
- (12) 註7の『西往寺由緒』。
- (13) 註7の『西往寺由緒』。
- (14) なお、箱の側面には京都国立博物館による資料管理のためのラベルが貼られる。

(15)

それには「誌公縁起／（宝誌和尚立像附属品）／西往寺／（美）九七六」とある。註2の毛利論文。木額の裏には墨書銘があり天保十一年（一八四〇）十月西往寺十四世諦譽の代に中井半兵衛が願主となって寄附したという。内容は「誌公観世音縁起」を簡略化したものである。寺伝によれば宝誌像を安置した観音堂の正面にかけられていた。現在、木額は所在不明であるが、この木額の拓本を写した写真五枚が西往寺に保管されるため内容を知ることができる。ただ拓本は表面のみで毛利氏が紹介した墨書については確認できない。さらに、ほぼ同内容の刊本も存在するが、本稿では割愛した。

木額拓本の全文を左記に掲げる。

誌公観世音略縁起

抑当寺観世音ハ、唐土宝誌大士の尊影之本地十一面観音ハ宋太宗泰始二年建康の東陽金城といふ處に朱氏の女あり。あるとき山に至りければ大樹の上に鷹の巢あり。其中に小兒の泣こゑあり不思議におもひ抱きおろし家に帰り養育しけり。此童七歳のとき鐘山の僧儉といふ僧の弟子となり落髪して宝誌禪師と名をつけ給ふ。師の貌奇麗にして面ハ鏡のことくなれど手足ハみな鳥の爪なれば時の人其名を呼んで鷹巢大士ともいひけり。種々の神変をあらはし給ふにより、梁の武帝甚だ尊信したまひ画工に勅して師の像を写し来れと宣告ありければ、画工師の室に到つて像を写さんとするに師曰くしからは我真の姿を現さん。是をうつし留よとて自ら右の大指の爪にて面を豎につんさき給はば、面の皮左右へわかれ内よりも金色の十一面観世音尊影を現し給ふ。画工写し奉らんとすれば、種々に菩薩の姿を現し給ふ。ゆゑに写し得ること叶はずかへりて、かくと奏しければ帝直に誌公の室に幸したまへば、師の相好尋常に□り正身の菩薩と現し給ふゆゑに帝たつてといし給ふ。夫より師ハ帝を伴ひて江の辺にいたり師杖を以て水中を探り給へハ水底より一の木浮び出たり帝これを觀覽あれば紫梅檀の香木なり。其時師帝に告給ふは、我姿をうつさんとおぼしめさハ此香木にて彫刻し給へハ有ければ、則五尺の木像を彫刻せさしめ給ふに誠に生るが如くことく相似たり。帝この像を内道場に安置し尊敬し給ふ事浅からざりけり。其のち我朝文武天皇の御宇故ありて此尊像東国伊豆の国へ渡らせ給ふ其みぎ

り役行者大嶋の配所におはしまして此像を尊信し当国庭冷山といふに納め給ひ流刑のうち専ら印呪加持し給ふ。其後延暦年中に弘法大師諸国修行のおり霊夢によつて彼地におもむき給ふに此霊像ましませしかば大師ふかく尊ひ給ひ年久しく雨露に□れたまふをかなしみ山中に一字の草堂を建立し給ふ。又年積て源の頼朝公石橋山の合戦のみぎり兵火のために草堂ハ焼失ぬ。しかれとも本尊ハ恙なく渡出給ふ源三位頼政の孫頼政夫婦息伊豆守仲綱の追福のため一字の堂を建立して此霊像を本尊とせられけりこの地山嵐瘴氣つよき故昔の堂ハ名ばかりにて本尊ハわづかの藁屋に年ふり給ふ然るにいつとなく伊豆国中の諸人此尊像の尊ときをしりて種々の祈願をかけ奉るに一つとして叶はずといふ事なし。取分て諸の病苦を救ひ給ふ重病の輩ハ日夜に参詣をなして本復せずといふ事なし。故に此尊像を病即消滅の観世音菩薩と唱へけりしかし此大士の御名実ハ誌公観世音と申也。貞享四年光舟といふ人豆州在位のみぎり此尊像を所の人に乞受て都へ守歸り奉り破壊し給ふを續ひ当寺に安置し奉る此霊像我都にわたり給ふてより貞享四年まで九百八十九年に及べり。事実ハ唐の書にては仏祖通記仏祖統紀釈氏稽古略本朝にては宇治拾遺物語観音感通伝仏法神変集等に委しく記しあり故にここには略する而已

京大宮通高辻 西往寺

- (16) 野馬台詩の日本における受容史については、小峯和明「予言者・宝誌の変成―東アジアを括る―」（久保田浩編『文化接触の創造力』リトン、二〇一三年四月、の中に「『予言文学の語る中世―聖徳太子未来記と野馬台詩―』吉川弘文館、二〇一九年六月」所収）、小峯和明『野馬台詩』の謎―歴史叙述としての未来記―（岩波書店、二〇〇三年十一月）等を参照。

- (17) 「誌公観世音縁起」には「誌公の真影十一面観世音菩薩の尊像」と記される。同縁起では本像の原所在を「建康の鐘山」とする。これは開善寺に安置された宝誌像を意識した記述とみられるが、同寺に安置された宝誌像の形状については鏡等を掛ける錫杖をもった姿で、面を裂く姿でなかったことを指摘したことがある（神野祐太「大安寺戒明請来の宝誌和尚像について」津田徹英編『組織論―制作した人々―』竹林舎、二〇一六年六月）。

- (18) 『続日本紀』岩波書店、一九八九年三月、一七頁。
(19) 宝誌和尚像と役行者像の形式の類似については、註17の神野論文で指摘したことがある。

- (20) 毛利久氏によれば、「寺伝では東寺の南の一堂に安置されていたものを、京都四条小路の下村某が買求めて西往寺に寄進したといわれるが、それと縁起との関係は審かでない。或は光舟のもつて来た像がまず東寺の南に置かれていたとすべきであろうか。」（註2の毛利論文）というが根拠は不明である。下村某は西往寺の檀家とみられ、明治三年（一八七〇）銘の西往寺祀堂日牌（西往寺蔵）に名前がみえる。

- (21) 戸羽山瀚編『増訂豆州志稿・伊豆七島志』図書印刷、一九六七年十一月、一九七頁。

- (22) 『掛川誌稿 伊豆国』郷土新聞社、一九六六年六月、一三七―一三八頁。

- (23) 註4の『月刊文化財』解説。

- (24) 上原美術館編『静岡の仏像+伊豆の仏像―薬師如来と薬師堂のみほとけ―』図録（上原美術館、二〇二二年十二月）。

- (25) 河津町教育委員会他『河津町史資料編』七（河津町の棟札）、河津町教育委員会他、一九九三年十一月。

- (26) 註4の『月刊文化財』解説。

- (27) 山武仏教文化研究会編『山武市の仏像』図録（山武仏教文化研究会、二〇一一年五月）。

- (28) 政次浩「仙台市に伝わる平安・鎌倉時代の仏像」（仙台市史編さん委員会編『仙台市史』特別編三「美術工芸」、仙台市、一九九六年三月）。

- (29) 神野祐太「京都西往寺宝誌和尚像附属文書「誌公像賛」・宝誌和尚画像と黄檗僧高泉」（『美術史研究』六二、二〇二四年十二月）。

図版出典

図 筆者撮影

【付記】

本稿は、科学研究費基盤研究（C）「足柄地方の宗教彫刻に関する基礎的研究」（JSPS科研費JP23K00173、研究代表者…神野祐太）の研究成果の一部である。

【謝辞】

本稿をなすにあたり、調査及び画像の掲載について西往寺住職桑生俊教氏、西往寺像の寄託館である京都国立博物館の淺湫毅氏（当時。現、追手門学院大学教授）及び主任研究員竹下繭子氏のご高配を賜りました。また、清泉女子大学名誉教授山本勉先生、早稲田大学教授肥田路美先生、同志社大学教授井上一稔氏、早稲田大学教授川瀬由照氏、京都大学准教授田中健一氏より調査時及び折に触れてご助言をいただきました。翻刻については、神奈川県立歴史博物館元専門学芸員古宮雅明氏よりご教示をいただきました。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

翻刻

【凡例】

- ・京都西往寺の宝誌和尚立像に附属する卷子二軸の内、「誌公觀世音緣起」の翻刻である。
- ・漢字・異体字等は原則として常用漢字に改めた。変体仮名は原則として常用の平仮名とした。
- ・段落、句読点を付した。
- ・行取は体裁の都合上原本には従わず、行の終わりに「」を用いた。
- ・翻刻にあたっては、古宮雅明氏（元神奈川県立歴史博物館専門員）よりご助言・ご教示を賜った。

【本文】

抑当觀世音菩薩はもろこし宝誌大士の尊影本」地は十一面觀世音菩薩の像なり。

其来由をかん」かうるに如来滅後一千四百十六年の星霜を経て、「宋太宗明帝泰始貳年丁午に建康の東陽に」金城といふ所に朱氏の女人有しに、有時山に至り」ければ大樹の上に鷹の巢あり。其中に小兒の」啼声聞へけるを不思議におもひ頓ていたきおろ」し家にかへり養育しけり。既に此わらんへ」年積て七才になりければ、鐘山の僧儉といふ」僧の弟子に送り、すてに出家落髮し宝誌禪師と」名を付給ふ。常に專禪法を修行したまひ折、」は皖山劍水のもとに往來し給ふ。師のかたち」奇麗にして面又鏡のことくなり。しかれとも手」足は皆鳥の爪なれば時の人其名をよんで鷹巢」大士ともよひけり。

此師初は江東の道林寺に往け」るか、後には居所をもさためすして或は五日十日」も食せざる時もあり。しかるに此師折、市中に」出給ふに錫杖に刀おひ鏡また絹などをかけて」はいくわいし種々に神変を現し給ふ。或は人に」対し物語し給ふにも、はしめは聞わくる人もなく」しかれとも後にはおのつから其ことはにるしあ」り。或は詩を賦して、諸人に交給ふに江東の士」庶人皆ことくく此師にしたかひけり。しかれと」も此師行跡定なく又持物に刀などをかけて提」携し給ふ故に齊の武帝思召にとかく此僧」は諸人をまとわすものと見へたりとて、や」かて永明七年にとらへて籠獄に入らるゝ。しか」れ共、もとより通力自在の体なれば、宵には」籠獄へ入なからあくれば師市に出給ふを諸」人見付たりといふかゆへにやかて籠の中をみ」ければ成ほと中に居給ひけり。

有時誌公獄官」の者に告給ふは、今こゝへ金鉢に飯をもりて來」るへし。汝等はを食せよと仰らるゝ所に齊の」文惠太子竟陵王の子良両所より誌公のもとへ」食を送り給ふ。すてに獄官の呂文顕といふもの」此旨をふかく感して武帝

に奏聞申ければ「武帝聞し召してやかて誌公を宮中にむかへ」給ひ専崇敬し給ふ。

有時僧正法献と云僧誌公「の衣なきことをかへりみて衣を持て遣し給ふ。使」者爰かしこと尋則竜光寺に至りければ昨夜」誌公とまりたまひ今朝帰り給ふよし申ける。又闕「寶寺に行尋けるに爰にてもおなしく答けり。」故に使の者も不思議におもひ属侯伯と云人の「家にいつも行給ふとて尋ければ、いかにも昨夜」これへ御出候て今もねふりたまひてましますと」申されければ、使者是を聞歸りて法献へ此よし」申ければ法献もふしきに思召誌公は身を三所にわ」けて宿りたまふ。神変なる事かなとふかく是を感」し給ふ。此師は冬の至てさむきにも御膚をあら」はしたまひ歩行したまへは沙門宝亮着物を」送らんとおもわるゝところに、いまたことはにのへ」さる内にはや宝亮の心を知りたまひやかて宝」亮のもとへ至りて衣服を乞受給ふ。

又其後天監」二年の事成に、誌公神通を以て梁武帝の御父」高武帝刀剣地獄に墮在し給ふ見せたまひけ」れば武帝是をみたまひ、深く仏法に歸入した」まひ、誌公をも尊敬し給ふ事専なり。

扱又天監」四年二月の事なるに、武帝有時夢見給ふに「神僧告ていわく六道四生受苦無量なり。なんそ」水陸無遮の大齋会をなして是を救済した」まはさるやと。みかと夢覚てもろゝの沙門に」尋給ふに大齋会の事しれるものかつてこれ」なし。誌公武帝に奏してのたまわく広く経」論を尋は定て因縁あらんとて則大藏経論を」披覽し給ふ事日を積て三ヶ年におよひ大」藏の中より因縁瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口」軌儀経をかんかへ出したまひ、無遮会の事を奏」聞し給ふ。帝是をきこしめして道場をかさり」平等の供物をそなへたまひ、ともしひを除き暗」夜に法事を執行し給ひければ、食物靈供こ」とゝゝく餓鬼来て是を食しけり。帝ふしき」におほしめされ暗夜に香をたき三宝に祈誓」し給ふは、此無遮の齋会偽りなくんはひとり」灯をか、けたまへと乞たまひ帝一礼

し給ふに灯」明忽かゝやきけり。

又再拝したまふに宮殿震」動し三礼におよひければ天上より花ふりく」たる事雨のことし。しかれば武帝奇異のおも」ひをなし給ひいよゝ仏道に歸入あそはされか」つうは禪師の御影なればとて、帰伏弥あさか」らさるものかな。

扱同天監四年の事なるに」武帝詔をくたしてのたまわく、宝誌大士は迹を」五歎のちにひとしくしたまへとも、たましひは」常に冥界に遊給ひ徳深して、水にもおほれた」まはす。又火にもこかれたまはす。毒虵もかいする」事あたはず。猛虎にもおそれたまはす。常に」仏法をかたり給ふ時は是ほさつにことならず」とて武帝張僧繇と云画工をめし出され勅し」てのたまわく。いそぎ禪師の室に至て師の影」をうつし来れよと勅を下し給ふ。僧繇宣旨」を蒙り誌公のもとへまかり、件の趣を申師の」影をうつさんとせしに禪師のたまわく、しからは」我まことの姿を顯さん。是を写しとゝめよと」て自右の五指の爪にて面つを豎につんさき給へは」面の皮ひとり左右にわかり内より金色の十一面觀」世音菩薩の像現し給ふ。画工是を写し奉らん」とせしに、或は金体ほさつの姿となり給ひ種々」に神変をけんし給ふ。故にちからにおよはす」むなしく禁裏にかへり、帝へ件の趣奏聞申され」ければ、武帝聞し召れいそぎ禪師の室に」行幸成たまへは、誌公相好尋常にかわりたまひ」直に正身の薩埵と現し給ふか故に武帝玉顔」に御涙をうかへ給ひ、ふかく尊みたまへは師武」帝に告てのたまわく、いささらは江の辺に」おもむかんとて、武帝をともしひ広々たる江の」辺にいたり給ひ、誌公杖をもつて水中をさか」したまへは水底より一本の木うかひ出る。禪師杖」にてよせ給ふに随て岸に着けり。帝是をゑい覽」ましませは紫栴檀しんたんの香木なり。其時誌公武帝」に告給ふは、わか姿をうつさんとおほしめさは此」香木にてうつしたまへと有ければ、武帝頓て官」人達ともろともに師の影を木像五尺に写し」給ふに生かこしく相似たり。既に彼像を帝内」庭に安置し給ひ尊敬し給ふ事浅からさるこ」となり。すてに禪師の御姿常のこ

とくに成給ふ。」

有時禪師聚落に出給ふに人の魚類のあつもの」を食せしを見給ひて是を乞受頓て食し給ふ。」いつとなく帝聞召されてのたまわく朕は二十年」あまり魚肉を食せざるに和尚は何とて魚肉を」食し給ふ」とひたまへは誌公のたまわく彼か生」を救んかために是を食せしむるとて頓て食し」たまふ所の魚類を吐出し給ふに師の口中より小」魚数々生ながら出ければ帝是をえいらん有」て深く感じ給ふ。今にもろこし秣陵と云所に」誌公の残魚とて是あるよし伝けり。

又有時誌公」行道の日化女忽然として来り禪師と物語す。」一女されは又一女来り、すてに一千八人に及けり。」其かたる所皆本朝の事のみなれば禪師あやしみ給ひて千八人の女を以て文字をつくり給」に乃倭の字になりければ是即倭国の神なら」むとて禪師其女人のこと葉を記し十二韻」の詩をつくり世にひろめ給ふ。今将来する処の」野馬台の詩と云は禪師の述作なり禪師」通力なくんは千八人の女人扶桑の異人成事を」知らんや。此詩有を以て後吉備公入唐し給」観音大士の奇瑞を世にあらはし給ふものかな。」

又天監五年の冬、天下大に早はつしければ誌公」盆に水を入給ひ其上に刀をくわへ呪し給ふに」忽雨車軸をなしてふりけり。亦天監六年の」事なるに舒州の潜山と云山は尤絶景にし」て山麓晴たる景地なり故誌公と白鶴道人」と兩人ともに此山を望給ひ帝へ奏聞申さ」なければ帝の宣旨には二人共神通自在な」りおのゝ其地へしるしを遣したまへ。はやき方」へ山を贈らんとしたまへは白鶴道人は瀛をは」なち給ふに暫時の内に飛行て羽をやすめ居」る処に又誌公は錫杖を虚空に投給へはやすみ」居る處の靄空中より錫杖の鳴下声を聞」驚たちて他所へ移りければ白鶴無念にお」もひ給へ共是非なく綸言汗のことくなれは」誌公彼山を得て精舎を造営し給ふ。

又陳」征虜と云人は常に誌公を尊敬しければ誌公」手つから影像をうつしておくり給ふ。此像折」々光明耀たまひて、ほさつの像と成給ふと。

され」は大観四年の春二月、恵洪といへる僧わつらい」ふしける處に夢の内に僧一人来り導て密」宝の内に至りともし火をか、見みせけるに、宝」誌大士の絵像、壁に懸り給ふを拝み心の内に」のそましくおもひければ、たやすく病者の掌」の内に入給ふ。よろこひこれを見るに、影像忽」然として十一面觀世音ほさつと成給ひ、大に是を」驚きければ夢は覺けり。しかるに其後」南州の徳逢上人といへる人より觀世音の尊像」をえかき恵洪のもとへおくり給ふ。其絵をかき」し日は恵洪の夢の折ふしにあたれりと。扱は」彼夢に現し給ふ尊像は、陳征虜よりつたはりし」像影なるべきものか。

又天監六年の事なるに、」帝夢に地獄受苦の有様御覽有て此よし」禪師へ御告ありければ、禪師のたまわく、かくの」ことくの苦を救ふには鐘聲の音利益深しと」仰られければ帝頓て鐘樓を建立し給ふ。」

又梁の武帝の御妃、御懷妊の刻使を誌公の許へ」送りたまひ誕生のおもむき聞給へは、誌公のた」まはく、いかにも皇子の御誕生目出度はんへれ」共此皇子御誕生の日、亦皇子のあたと成人生」る、なりといへり。然にかの皇子後には晋安の」王蕭綱と申。又あたと成とは侯景か事なり。既」に後には侯景蕭綱のあたと成ければ、年数を」推尋るに同年同月日の出生なり。是をもつて」誌公よく未来の事迄知り給ふと人々感心せし」むるものかな。

又会稽の臨海寺に大徳あり。世」にかくれなき明通なりけるか、揚州の都に宝誌」と云狂気人有て遊逸無儀の有様をなすと人」語りしを聞て彼僧いわく、其宝誌と云もの」は定て狐狸の反化成らん。我都に行、獵犬数多集」てかり出さは、おのつから追拂せん、とて頓て犬数」多船に乗、海にうかへ浦江と云処へこき出し西の」方へのほらんとし給ふに忽大風吹来る。船はすてに」東南の方へ六七日の間吹流し頓て一の嶋に至り」ければ、此嶋に黄金の塔有。高き事は雲にそひ」へけり。則此嶋にあまり尋行ほとに一字の寺有。」美麗成事かきりなし。しかるに此寺より年の」ころ三十斗の僧五六人ほと身にけさをかけ」

手には杖をつきて門のほとりに出給ひ、件の僧を「みていへるは、上人は揚州の都に趣んとて風に飄」されて此處へ来り給ふとみへたり、と云へり。彼僧「是を聞給ひて、尤、と答ければ、揚州へおもむかん」とおもひ給は此書帖を持て行給へ、とて書帖を」認て、揚州鐘山寺の西行南頭の第二房にて黄」頭と尋、此書帖を渡給へ、と云て立わかれ給へは」僧は則船に打乗て座して目を閉給ふに風静」にして眼を開見ければ、船は忽揚州の西の岸」に着けり。頓て船よりあかりて数十里斗行て」都に入給ひ鐘山寺を尋給に西行南頭第二房」は宝誌和尚の寺なりけるか、黄頭と尋けるに」更に答人なし。又宝誌和尚と尋ければ、宝誌」は常に内裏にましまして百日に一度も此寺に移」給ふ事なし、といへり。然るに忽誌公は寺の厨にま」しまして、たとへは酒の多いさめのことく成体にて、何とて我には食をあたへさるや、とのたまへは、臨海寺」の僧是をみて試に沙弥をくりにつかはし、黄頭、と」呼しむれば、誰か我をよふ、とて忽誌公出給るて、」沙弥と共に彼僧のもとにいたり給ひてのたまわく、」汝は獵犬を持来り。我をとらゑんとたくみける」か何とておそく来れるや、と被仰ければ、臨海」寺の僧是を聞大きに驚、頓て誌公を礼拝し」慙愧懺悔して、則書帖を捧たまへは、誌公書を披き」見給ひて、方丈の道人我をよふ何月何日にかへる」へし、と指を屈しかそへ給ひて、又此僧と語り」たまふ事もなし。衆人書記して述けるに天監」十三年の冬、台城の後堂におゐて何人ともしら」すよはわりけるは、さらんとしたまふこと旬日をす」きす、といひて失けり。然るに禪師はやまひ」なしといへとも、兼て日さしをし給ひ、同天監十三」年十二月六日ことふき九十三才にして遷化し」給ふ。誠に御屍骸異香薫し御貌はいろもか」わりたまはず。しかるに御遷化の時禪師の室に」一燈をのこしたまへは武帝是を歎してのたまはく、」大師は朕に法灯をのこしたまへり、とて、武帝黄金」式拾万両をもつて建康鐘山の独龍の岡をもと」め、禪師の遺像を葬たもふ。然に葬送の砌空」中雲の中におゐてほさつと現し給ふ。帝ゑいらん」ましまして、

やかて道林真覺ほさつとおくり名を」し給ふ。

又墓所に一字の伽藍を建立し給ふて」其寺号を開善寺と付給ふ。扱又陸倕と云者に」勅し給ひ、銘を塚の内に製し給ふ。又五箇と云者」碑の文を寺門に勤しけり。

又定林寺と云招提に彼」紫梅檀の像を納給ふ。誌公述作し給聖教は大乗」贊十篇料誦十四篇十二時の韻等なり。皆是其道」儀を宣たまへり。

彼天監十三年は吾朝人王廿七代繼」体天皇の御宇辛午の年にあたれり。凡元禄二」年己巳の年までは一千百七十六年の星霜を経る」なり。上件の誌公の来由は委は支那選述仏祖通載八九」の巻。又は仏祖統紀卅四卅八篇、尺氏稽古略二篇等近」くは本朝宇治大納言の拾遺集。又は観音感通伝の中」巻沙門智海の仏法神変集等に明に是を記ものなり。」

已上漢土の有縁畢ぬ。

已下又誌公の像」日本の来由なり」

爰に我朝仁王卅五代舒明天皇の御宇辛午正月朔日に」和州葛木の郡茅原の里に役の優婆塞と云し人出生」し給ふ。幼時より其性発明にして年廿二の時独り」家を出給ひ、同国かつらき山に分入廿余年の星」霜を経て既に仙術を修練し通力自在の譽を」得給。然るに人王四十二代の帝文武天皇の御宇己亥」年五月に小角事の故有りて、東国伊豆の大嶋」に流れ配所に居給ふ事既に三ヶ年の間なり小角」飛行の体なれば夜、ははるく富士山にのほり、明」れは配所に帰り居給ふ。然るに小角配所へ御母一所に」ましましては、一日御母を鉢に乗、みつからハ草を座」として海にうかひ暫時のうちもろこしへ渡り給」けるに其折南都元興寺の道昭律師求法のため」に入唐し給ひければ忽虎一疋来り。律師を作」礼して和国の言葉にていわく、新羅山の中に虎」多く集る。かれに来りて法をとき化益し給へ、」といふ。律師、尤、と請給へは頓て其所へ誘引す。既」に五百あまりの虎あり。律師もろくの虎に」対し説法したまへは、さいせん

の虎、律師の言葉を「うけてもろこしの虎の言葉になして是をとく。」故にもろ／＼の虎此通しによつてとく／＼と仏法」を聴聞す。既に説法畢て、律師通しの虎にとひ「給ふは、何とて其方は本のことはよくしりぬ、」と問ひ給へは、虎答ていはく、我はこれに本役の優「婆塞なり。もろこしの異類を化さんために来れ」り、と云へり。道昭も是をきこしめし深く行者の徳」をたんし給ふ。それよりもとの姿と成給ひ、かなた「こなたをめくりたまひ、建康の鐘山におもむき給。」彼武帝造営なし給ふ誌公の真影十一面觀世音「菩薩の尊像を拝みたまひ帰敬浅からず。かつうは「弘法利生のためなればとて、彼尊像をこひうけ」給ひ帰朝の砌隨身し給ひ則伊豆国庭冷山と云」所に納たまひ流刑の内專印呪加持し給ふ。然る」に小角の入唐し給ふよりまへ誌公入斎のほとを」かんかふるに二百余歳の星霜を満つ。

又其後「延暦年中に弘法大師諸国をめくり給ふおり伊」豆国桂谷山寺に至り給ふ。桂谷山又云は修禪寺云々大師御指にて「虚空にむかひ大般若経をうつし給ふに魔事品」に至て文字忽虚空に現しさま／＼奇瑞を」なし給ふ折空海まところみ夢みらく。此寺より南の」高き峯におゐて大悲の尊像まします。是則昔日「もろこしに宝誌禪師とて世に尊き知識あり。其」本地十一面觀世音ほさつの真影を梁の武帝紫「梅柎梅の香木を以うつし後には鐘山に納給ふを、役」の小角通力を以て入唐し彼像を拝み隨身し」給ふ霊像なり。急き尋ておかめよ、とかくのことく「霊夢を得給ひてやかて夢覺て彼地におもむき」給ひければ夢にたかはすほさつの像ましましけ」れは、大師深／＼たとみ給ひ印真加持し給ひて尊」像雨露にうつもれ給ふをかなしみ山中に一字の」草堂を建立し給ふ。

其後又年積て源の頼朝公「石橋山合戦の砌兵火のために草堂は焼うせぬ。」しかれとも本尊は麓の土民取かくし置しを伊」豆守仲綱公本願として亡父兵庫守頼政又あやめの前のために木像を伊豆の国に建立し給。」折ふしおもはさるに山中にて菩薩の像を拝みたまひ」山中常に霧ふかく雨露のしたたりによつて尊

像」朽給ふ事を悲しみ後世ほたいのためにとて既」に一字の堂を建立し給ふ。しかれとも山中」嵐はけしく湿氣甚敷故にやむかしの堂は名は」かりにて本尊はわつかのわらやに年ふり給ふ。然る」にいつとなく伊豆国中の諸人此尊像を拝み出し」種々の祈願をかけるに一つとして満足せずといふ」事なし。大悲の利益多き中にも取わけもろ／＼の」病苦をすくい給ふかゆへに人此尊像を病即消滅」の觀世音ほさつと唱へけりしかし此ほさつの御名」をは実には誌公觀世音ほさつと申なり。

扨其靈」験を伝聞に明徳元年の頃伊豆の国伊東村の近郷」住山本図書といへる人有。此人ひとりの男子を持ける」に幼して疱瘡をわつらい両眼盲目となりぬ。父母」是をふかく悲しみ此尊像の靈験あらたなる事を」聞つたへ、則參詣をなしほさつの尊像を拝し奉り」信心折にめいし既に一七日參詣の祈願をなしし」処に大悲の誓願時をまたす、いまた一七日まんせさ」る内に病人両眼本のことくひらきければ両親是」をよろこび薩埵の御かけと尊くおもひ侍り則み」つから一字三礼の普門品卅三篇と写し彼草堂」の砌に納め供養のために石碑を建立せしと」かや。されは今におき伊豆の高峯に彼石碑有」て明徳の年号かすかにみへけると彼国の人」いひ伝へけり。されはにや此尊像疱瘡の病難を」利益し給ふ事道理尤やいかなとなれば、もと」十一面觀世音菩薩は疱瘡の守護の大士なり。

其」例證をかんかうるに吾朝越前国泰澄禪師も」本地十一面觀世音ほさつにして利生方便是多し。」然るに天平八年の頃天下疱瘡多くして上下萬」民老少となく皆是をわつらひ十死一生の事」成に上天子より泰澄禪師に十一面觀世音ほさつ」の法を執行有へきよし勅定なし給ひければ、澄」公勅に随て是を修し給ふ処に天下の疱瘡忽平」癒し死せるものもこと／＼く蘇生せしと。誠に「薩埵の大慈悲身を六体に分て広く六道の受苦」をすくひ給ふ中にも取わけ十一面の尊像は修羅」道の重苦を救ひ給ふ。故に又は大光普照觀世音菩薩」とも申な

り。十一面と申ハさつたの頭上に十体の仏ほさ」つをいたき給ふ。右の御方には大日尺迦文殊の三体、」又左の御方には不動虚空藏地藏の三体、うしろには」勢至弥勒の式体、眉間には弥陀如来、頭上に薬師如来、」本体をくわへ十一めんとな給ふ。しかれば此尊像にむ」かひ奉れはおのつから数々の仏ほさつに結縁し奉」なり。

又仏説十一面神呪經に説てのたまわく、若善男」子善女人有て毎朝神呪一百八反を念誦せば現世に」おるて十種の勝利をあたへん、と云へり。其勝利といふは」一には身常に病なく、二には常に十方の諸仏摂受し給ふ。」三には財宝衣食受用するにつくる事なく、四には」よくおんてきを伏しておそる々所なく、五にはもろく」の尊霊のために恭敬せられ、六には毒蛇惡鬼の」さわりをのかれ、七には一切の刀杖の難なく、八には水に」おほるゝ事あたはず。九には火燒事あたはず。十には横死」有事なし、とかくのことく勝利を説給ふ。爰に当尊」和朝に渡給ひしより貞享四年丁卯の年まで」九百八十九年におよび、聚落に出給ひ多くの衆生を」利益し給ふ事さつたの大悲淺からざる事たれ人」か信仰せざらんや。されはにや大悲の威光日々にま」し重病の輩昼夜に参詣をなして勝利を得」もの数をしらす。

又幼児絶命に及しか此尊像に」祈誓せしめて忽蘇生せしも有。

又此尊寄」附の優婆塞は元禄二年己巳正月廿八日のあした」当尊枕のもとに現し給ひ、さかめるや補陀落山の」花さかり、とある一句を夢の内にさつけ給ふ。此外当」尊新古の靈験は牛車に積てもあまり有物哉。」

上件の和朝の伝記等は師練の尺書一の卷又十五」の篇亦袖中抄六卷見聞閑書十一面經等をも」つて是を記し其外当尊古来の伝説を尋」かつうは本尊の厚德を顕んかため又は衆生の」信心を勧んとおもひくわしく縁起をつたり」軸となし畢。」

元禄二歳己巳三月上旬洛下西往寺四世」念蓮社尊譽甚阿恢存叟勤誌之」

追加」

当尊かく都に出給ふ事光舟昔日豆州在住の砌」ふ覺に此尊を拝み奉り山中にうつもれ雨露のしたゝ」り、ふかく尊像損し給ふ事を悲しみ彼所の人々に」此尊像を乞受、遙々都に隨身せしめ尊像破」壊し給ふ所をかいつくりひ、後世ほたいのために」当寺常住物に納給ふものなり」

維時貞享四年仲秋時正日」

願主 寛氏 市タ子 光舟 法名 西岡浄紅善士」喜捨之」

[illegible]

[illegible][illegible][illegible][illegible]

[illegible]

乙卯年四月廿九日大坂市河津十村に棲死
 有年なり。其の年九十有餘。死後、其の妻と
 和如く偕なり。其の死後、其の妻と
 乙卯年九月廿九日大坂市河津十村に棲死
 有年なり。其の年九十有餘。死後、其の妻と
 和如く偕なり。其の死後、其の妻と
 乙卯年九月廿九日大坂市河津十村に棲死
 有年なり。其の年九十有餘。死後、其の妻と
 和如く偕なり。其の死後、其の妻と